

第一部 救国軍事會議

(一) 亡命

フェザン回廊から、自由惑星同盟領に入る事約一四〇〇光年の宙域に浮かぶポレスト星系第四惑星ゾーシム。そのゾーシムの衛星軌道上に設置された入国最終審査機関の事務所を、風変わりな二人の男女が訪れたのは、宇宙暦七九三年二月のことである。

銀河帝国からフェザン回廊を経由して自由惑星同盟に入国を求めてくる、いわゆる亡命者たちに対して入国の可否を審査し、最終的な手続きを行う施設、それが入国最終審査機関である。つまり、ここを訪れた二人は、フェザンに置かれた同盟領事館での一次審査をパスして最終審査受審を認められた、帝国からの亡命希望者ということになる。

一五〇年前、ダゴンの会戦で存在が帝国の中に知られて以来、何百万、あるいは数千万を数える亡命者が同盟領に流れ込んできた。当初は『来る者は拒まず』の態度で彼らを迎え入れてきた自由惑星同盟だったが、やがて帝国の内乱にもなう難民や、さらには同盟内部に通牒の網を広げようとする偽亡命者までが流入し始めるに及んで、一定の枠を設けるようになった。その一環が、このゾーシムの審査施設だった。

その意味で、年間何万人もの亡命希望者が訪れるこの施設にとって、珍しくも何ともないと言つべき訪問者だったが、三〇代の、明らかに帝国軍軍人上がりに見える男性と、こちらは一〇代

前半、あるいはまだ一〇歳か十一歳になったばかりに見える少女の組み合わせは周囲の視線を惹いた。男性の方は軍人らしい引き締まった体躯以外には特徴らしいものを持ち合わせなかったが、少女の方が行き交う人々の視線を不思議なほどに引き寄せるのだ。本人たちにとっては、そんな周囲の関心は、それこそ関心の外だっただろう。フェザンと同盟中枢を結ぶ定期航路の要衝にも関わらず、奇妙なほど寒々しい印象のある施設の中を足早に歩き過ぎていった彼らの姿は、やがて『審査室』のプレートの掲げられた一室に吸い込まれていった。

「帝国に於ける原姓名はマルガレータ・テレゼ・フォン・ヘルクスマイヤー。ヘルクスマイヤー伯爵家の長女。亡命希望理由は、父ヘルクスマイヤー伯爵関係の政治的抗争の結果として、帝国の官憲の追捕を受ける身となったため……間違いはないか？」

質問の口調は事務的な有能さを示すには粗雑に過ぎ、役人特有の事務作業的な平板さというには、相手への軽侮が露わすぎた。

特に後者を敏感に感じ取ったらしい少女が浮かべた表情は、彼女の年齢にはおよそ似つかわしくない、険しい敵意をはらんだものだった。

「そうだ、間違いはない」

声音そのものは一〇代前半の少女特有の、未完成な不安定さと柔らかさを伴っていたが、声のトーンはそれらを完全に裏切って硬質な響きを帯びていた。

「その書類に書いていないのか？」

「確認のために訊いているんだ。そつちは書類を書いて出せば済むと思っているだろうが、こつちは年に何百件もこんな書類を審査しているんだ。不備な書類を出した挙げ句に、文句だけは一人

前に言ってくれるような、お偉い帝国の××なお貴族様とやらとも飽きるほど話をしなきゃならんのだ、伯爵令嬢殿」

「……」
「そんないで尊大な口調で嘲弄の言葉を投げつけてきた相手に向かって、少女は、角度によっては僅かに翠色を帯びて見える紫水晶の瞳から非好意的な視線を突き返した。」

少女は、まだ一〇歳を幾つも超えていない年齢に見えた。豊かな淡い色調の金髪と、育ちの良さをうかがわせる柔らかな丸みを帯びた頬。綺麗に通った鼻筋の下で、やや厚めの唇が淡い珊瑚色を帯びている。『美女』と評するにはまだ幼すぎるが、一〇年もすれば十分にその言葉に値する容姿を主張できるようになるだろう。……で、年齢は一二歳——と。一二歳と言うことは宇宙暦で何年生まれか言ってもらいたい」

その眼差しのきつさに怯みを感じたのか、亡命審査窓口の係官はほんの少しだけ口調を改めて質問を投げつけてくる。

少女の傍らに立っていた、同行者らしい、こちらは三〇代前半に見える茶褐色の髪、穏やかな風貌の男がはっとしたように表情を動かしかけた。しかし、少女の応答は一瞬の遅滞もなかった。

「宇宙暦か、宇宙暦だと七八一年だろう。帝国暦四七二年二月二日生まれだから……なぜ、そんなことを改めて訊くのだ？」

「同盟の市民になる以上、戸籍が必要だ。戸籍を作成する以上、年齢は必須の情報だからだ。それに、時々年齢を詐称してくる連中がいる。同盟には年齢によっていろいろと恩恵もあれば義務もあるということだ」

「詐称はしていない。証拠の書類も出しておいだ」
窓口の向こうで、係官が視線を横に流したのは、別の端末からスクリーンに表示された情報に目をやったためだろう。

「帝国の書類なんぞ信用できるものか。何しろ、あのルドルフの

建てた国だからな。騙すのはお得意だろうが？」

「そなたが、なにゆえにそのように私を侮辱したがるのかは分からないが、歳を偽ったところで私には何も良いことはない。それともそなたは私がもう二〇歳だとも言いいたいのか？ それとも一〇歳にもなっていない子供だとも？」

その声は低く、不必要な刺激を同盟の役人たちに与えないよう制御を伴っていた。弾け飛びかかっている感情の奔出を、紙一重で押さえ込んでいる不安定さはほとんど口調であつたにしても、だった。ただし、少女の目は危険すぎるほどに剣呑な光を帯び、彼女を不快さのどん底に突き落とした連中を、目に見えない視線の槍で突き通していた。彼女の視線が物理的な存在を持つとすれば、この審査室内の係官たちは全員、壁に串刺しになっていたに違いない。

言い負かされた、と感じたのかも知れない。係官は正面からは言い返そうとはしなかった。

「——すかした口を利きやがって、小娘風情が」

小声の悪態は、少女の耳にはとどかなかった。届いていても、彼女の同盟公用語の知識では理解しきれなかっただろう。代わって表情を動かしたのは彼女の同行者の方だった。

「フロイライン・マルガレータ」

きつい紫色の光を帯びた視線が一閃して、男の瞳を正面から睨み付ける。

「フロイラインは止めよ。妾もそなたも、国を捨てた時に、この国の流儀に従おう。そう申し合わせたではないか。もう忘れたのか、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

ヴェンツェル・ハインリッヒと呼ばれた男は温顔に微笑を浮かべた。

「さようでしたね。フロイライン……いえ、マルガレータ」

「なぜ、このような侮辱を受けなければならない？ 私やそなたが何をした？ 帝国に逐われ、やむを得ず救いをこの国に求めただけではないか？」

「お気持ちは分かりますが、ここで抗議を申し入れたところで、何か得るものがあると思いますか？ 父上は、リッテンハイム侯に命じられるままにブラウンシュヴァイク公の秘密を探ろうとなさいました。その結果がどのようなことになったか、それをお話し下さったのはあなたではないですか」

少女……マルガレータは唇を噛みしめる。よほどの口惜しさを堪えているのだろう。噛みしめられた唇が血の色を帯びるほどに充血し、握りしめた両の拳が微かに震えているのが見えた。

「マルガレータ——」

ヴェンツェル・ハインリッヒが声をかけていなければ、あるいは下唇を噛み破っていたかも知れない。

「分かっている。そなたの言うとおりだ」

マルガレータは頷き、係官に向き直った。

「話は済んだか？ 我々も暇じゃあない。内輪の打ち合わせは事前に済ませておいて欲しいもんだ——まあ、年齢について言えば、お嬢さんが二〇歳の女性でも五歳の幼児でもないことは、身体検査の結果を見れば直ぐに分かる」

係官がわざとらしく身体の位置を変えたのは、『検査結果』の表示画面を少女……マルガレータの視界に入れるためだった。一連のテキストと並んで、複数の立体画像が表示されており、幾枚かは明らかにマルガレータ自身の『検査中』のそれだった。

少女が恥辱に頬を染める姿を期待したのだろうが、マルガレータは特に表情も顔色も変えなかった。

「そういう情報を被審査者に見せるのは、そなたの服務規程に違

反しているのではないのか？ それとも私の感想を答える必要でもあるのか？」

予想外の応答に、係官は一瞬唖然とした表情になり、慌てて身体の変えて視界を塞いだ。咳払いして端末を操作した。

「七八一年二月二日生まれ……一二歳で確認。登録希望氏名はグレイチェン・テレサ・ヘルクスハイム——原氏名をそのまま名乗らないのか？」

「構わない。帝国での名前を名乗っていたところで、意味などない」

これもマルガレータが言い出したことだった。同盟領にも旧帝国での氏名をそのまま名乗っている亡命者は多い。いや、ほとんどがそうだという。亡命時に同盟風の名前に改名する方が稀なのだ。特に帝国で高い地位にあったもののほど、帝国での氏名に固執する傾向が強いと聞いた。

当然、マルガレータ・テレゼ・フォン・ヘルクスハイマーをそのまま名乗るだろうと思っていたヴェンツェル・ハインリッヒに、少女はこともなげに告げたものだ。そんな長い名前は要らない。名前はグレートヒエンの方が呼ばれ慣れていて良いし、フォンの称号も貴族のない国では不要だろう。ヘルクスハイマーの名前も長すぎる。

そう言って、彼女が選んだ氏名がヘルクスだったが、さすがにグレートヒエン・ヘルクスではどうもバランスが悪すぎる気がする——ヴェンツェル・ハインリッヒの言葉に、マルガレータはあつさり頷いた。

「では、ヘルクスハイムにしよう。グレートヒエン・ヘルクスハイム……ちょうど、釣り合いが取れていて、良くはないか？」

そのグレートヒエンも同盟公用語では余り一般的ではなく、発音もしづらいので、グレイチェンではどうか……これはフェ

ザンで知り合った独立商人からの忠告だった。さすがのマルガレータも、グレートヒエンの呼び名には愛着があつたらしかつたが、最後はまだ一歳にも少し間のある少女としてはあつぱれと言いたいくらいに割り切つてのけた。『それがこの国の流儀じやというなら、従おう』——と。

「一度選んだ登録氏名はよほどの理由がない限り変更できないのが原則だ。犯罪者や徴兵逃れの間が身分を隠して潜伏するのを防ぐためにも、この原則にはほとんど例外が認められないが、それでも良いのか？」

「グレイチエンは、もともとわたしの呼び名だから、まったく違う名前になるわけでもない」

「なるほど、帝国にも住めなくなつた以上、我が国以外に行くところもない。なりふりかまつちやいられないつてことだ。帝国貴族のご令嬢も、哀れなもんだ。帝国などに生まれるもんじやないな」

また言わでもことを……マルガレータの激昂を危惧して一瞬ひやりとした思いをしたヴェンツェル・ハインリッヒだったが、当のマルガレータは意外にも冷静そのものだった。ただし、係官の嘲弄が彼女の感情に爪を立てなかつたわけではなく、表面上の平静さが優れた理性の制御によるものだったことは、その後で知られることになるのだが。

「それは私の事情だ。そなたにとにかく言われることではない」

係官は甚だ非好意的な視線をマルガレータに向けたが、それ以上の嫌味や嘲弄は無駄と悟つたようだった。彼女に關してはそれ以上の審査も残つていなかったのも事実である。

「入国カード」

マルガレータが差し出した入国審査書類を収めたカードを受け取り、幾つかの操作の後に、窓口のカウンター越しに投げ返して

寄越す。非礼と言えば非礼極まりないやり方だったが、マルガレータは黙つてカードを受け取つた。

「行きましょう」

彼女がカードをしまうのを待つて、ヴェンツェル・ハインリッヒが声をかける。

「——うん」

頷き、マルガレータ……いや、以降は彼女のことをグレイチエン・ヘルクスハイムと呼ぶことにする……は、審査窓口前の粗末なスツールから滑り降りた。

「——あのような下司、怒るのももつたいない」

マルガレータことグレイチエンが初めて感情を露わにしたのは、宿舎に戻る道すがらのことだった。

「あの男、自分が異常性癖者であることを自慢して何が面白いのか？」

係官がこれ見よがしに表示させ、彼女の視界に入れた立体画像には、グレイチエン自身の裸身を写したものも含まれていたのだが、彼女はそのことを恥じてもしなければさして怒りを覚えてもいない。典型的な帝国の門閥貴族に生まれ育つた彼女にしてみれば、裸身を他者、特にあの係官のような『下司』に見られることにさして羞恥は覚えない。むしろ、そうした自身の卑しさを殊更に誇示する相手の精神構造が、彼女の怒りと反発を買つたのだ。

「帝国にもああいふ手合いは大勢居ましたよ……ええと、マルガレータと呼ばばよいのか、グレートヒエンと呼ばばいいのか、どちらですか？」

「グレートヒエン……」

呟くように少女は答えた。不意に屹と視線をきつくして、

ヴェンツェル・ハインリッヒを見上げる。声を沈ませてしまった自分に腹を立てたらしかった。

「せめてそなた……ヴェンツェル・ハインリッヒくらいにはグレートヒエンと呼んでもらった方が良い」

「分かりました、フロイライン・グレートヒエン」

「フロイラインは要らない。それに、この国に入ったからには、この国の公用語を使いこなさねばならない。違うか？」

「ええ」

「そなたは良いな、この国の公用語をしゃべれるのだろうか？」

「士官学校では必須の教科ですし、情報部では叛徒……ではなくて同盟公用語を母国語のように操れねば、仕事になりません」

「では、これからも教えてくれるな？」

「無論ですが……同盟の中心部へ行けば、専門の教師も雇えるでしょう。わたしがお教えするよりもずっとその方が効果的です」

「そうかな……」

豊かな金髪を揺らせながら、グレイチェンの口調がちよつと曖昧になる。軽く唇を噛んでから、またヴェンツェル・ハインリッヒを見上げた。

「ではこの国の首都に着くまでは頼む。そなたはわたしの後見役なのだから、そのくらいは頼んでも良いだろう？」

「ええ、喜んでお教えしますと」

「にしても、年齢を確認された時はひやりとしました——ヴェンツェル・ハインリッヒは笑った。

「言い出したのは私だ。一二歳と言うからには帝国暦では四七二年の生まれになるし、宇宙暦とやらは帝国暦に三〇九年を加えた数字になる。そのくらいは予習してきた」

「計算しているようには見えませんでしたけれどね」

「計算などしては間に合わないではないか。暗記してきたの

だ」

帝国暦四八四年を迎えて一歳。それが、この少女の本来の年齢だったのだが、彼女が実際の年齢よりも年上であるように装いたいと言いついたのが、同盟領の最前線基地のあるルウエヴィト星系に入る直前だった。

グレイチェンの父ヘルクスハイマー伯爵の一行は、フェザン回廊を同盟領に入ったところでラインハルト・フォン・ミューゼル中佐の『ヘーシユリッヒ・ヘンツェン』に追撃・拿捕されている。本来、亡命のための諸手続きはフェザンの同盟領事館で行われる。その際にはグレイチェンの年齢もまた申請されているはずで、今更の年齢詐称などできるはずもなかったのだが、この時はある偶然がグレイチェンに幸いした。

門閥貴族の一員として、自らの意志が直ちに行われるのに馴れていたヘルクスハイマー伯爵である。帝国からの亡命者を、ある意味で祖国の裏切り者と見なして蔑如の目で見下すのを常とする同盟の下級官僚との間に軋轢を生じなければ、これは奇跡のようなものだった。

結果としてヘルクスハイマー伯爵らがフェザンに足止めされ、ラインハルトによる追捕の舞台がフェザン回廊の同盟側出口宙域ではなく、フェザンとなつていても不思議ではなかったのだが、事実はそのようにはならなかった。

『取り敢えず、ヘルクスハイマー伯爵とその夫人、および令嬢を始め、その従者一行の同盟領への入国を認める。個々人の亡命申請はルウエヴィト星系で行うものとする』

伯爵の手許から領事館に流れ込んだ多額の現金が、悶着にけりをつけたものだろう。伯爵自身と言うよりも、家宰あたりが気を利かせたものでもあろうが、とにかくヘルクスハイマー伯爵らは、予定を僅かに遅れただけでフェザン回廊の通過を果たしたのだ。

最初は驚いたヴェンツェル・ハインリッヒだったが、直ぐにその意を了解した。彼女をしてそうした決意に至らしめたのは、あの二人の若者達に違いなかったからだ。何しろ、その後に続いたのが、『同盟にも士官学校があり、女子の身でも一六歳以上であれば入学が可能と聞いた』という言葉だったのだから。

「何歳も上を詐称するのは難しい。せいぜい一歳が良いところと考えてください」

ヴェンツェル・ハインリッヒの回答に、マルガレータは微笑つてうなずいた。『そなたに任せる』——と。

亡命申請の手続きが先延ばしになっていたことに併せて、ヴェンツェル・ハインリッヒが帝国軍情報部に勤務していた前歴が役に立った。マルガレータの正式な出生証明書を改竄し、帝国暦四七二年生まれであるとするまったく別の証明書を作成し、原本は破棄する。船に積み込まれていたアルバムや日記類も同じように修正を施した。いずれ、一〇代前半の少女一人のこと。一歳や二歳の年齢詐称を細かく詮索するはずはない……ヴェンツェル・ハインリッヒはそう踏んでいた。万一の際には、帝国と同盟に共通の、役人を物わかりのよい人間に変えるための特効薬も用意してある。

『特効薬』のことはできればマルガレータには知られたくなかったヴェンツェル・ハインリッヒだったが、無駄だった。特効薬の用意には、グレーチェンがラインハルトに許可された、ヘルクスハイマー伯爵家の資産に手を着ける必要があったからだ。

「使えるのなら使えばよい。つまり、その程度の国だということじゃろう？ 自由の国とやらも大したことはなさそうじゃな」

資産の使途について問うことこそなかったが、グレーチェンが決して何も知らない無邪気な姫君でないことは、その言葉だけで明らかだった。

マルガレータ・テレゼ・フォン・ヘルクスハイマーとその後見役ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング。二人の亡命申請は、彼らがルエヴィトに着いて一週間もしない内に受理され、二人の許には同盟政府の発行した旅券と、ポレヌト星系ゾーシムへの出頭期日を記した書類が届けられたのだ。ただし、ヘルクスハイマー伯爵の資産はその大半が一旦凍結され、それだけが五〇〇同盟通貨^{ディナール}の現金のみ所有を許される。亡命が許可されれば、資産はグレーチェンに返却されるが、その際、法によって定められた率の課税がなされるとの通告も併せて行われている。いずれにしても、ヴェンツェル・ハインリッヒとマルガレータが惑星ゾーシムにあるのは、そうした経緯の結果だった。

「同盟公用語についてはそうですが、しばらくは駄目ですね」

「ああ、そうじゃ……そうだな。そなたの審査、長くかかりそうか？」

グレーチェンの瞳が笑顔を潜めた。見る見るその表情に影が差し、この少女にしては珍しく、瞳が不安げに泳ぐ。

「あの装置を首尾良く同盟領まで運び込めておれば何も心配することはなかったでしょうが」

ヘルクスハイマー伯爵は亡命に際して重大な帝国軍の機密を持ち出していた。指向性ゼツフル粒子の発生・制御装置に関する情報であり、単に情報だけでなく帝国軍技術総監部で試作中の実用試作装置までを盗み出して自家用船に積み込み、フエザン回廊を経て同盟領への亡命を企てたのだ。

当然のようにこの亡命劇は帝国軍の察知するところとなり、一隻の高速巡航艦が亡命阻止のために派遣されてきた。それが僅か一六歳の中佐ラインハルト・フォン・ミューゼルの指揮する巡航艦『ヘーシュリッヒ・エンチェン』だった。ラインハルトはフエ

ザーン回廊出口の同盟領境界宙域でヘルクスハイマー伯爵の自家用船を捕捉、武装と通信装置を破壊して足止めし、接舷して装甲擲弾兵を送り込んだ。

ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング帝国軍少佐は、指向性ゼツフル粒子発生・運用の実用試作装置の奪回を任務として『ヘーシユリッヒ・エンチェン』に同乗し、この時も装甲擲弾兵の一隊と共にヘルクスハイマー伯爵の自家用船に乗り移っている。

事破れたりと覚悟したのか、最後のあがきだったのか、ヘルクスハイマー伯爵は一家郎党と共に救命カプセルでの脱出を試みたが、そこで悲劇が生じた。脱出カプセル射出装置を作動させた際にカプセルの気密が失われ、伯爵以下ほぼ全員が減圧事故で死亡したのである。ただ一人の例外が伯爵の一人娘だったマルガレータだった。

「それは言っても始まらない。私は納得してあの者たちにキー・コードを渡したのだし、悪くすれば何もかも奪われて、身一つでフェザンへ放り出されていたかも知れないのを、あの者たちは見逃してくれた。そなたにしても、あのまま帝国へ帰っておれば、機密を取り戻して戻ったことを皇帝陛下にお褒め頂けたであろうに」

彼女が、父から預けられていた装置のキー・コードを譲り渡すことに同意すると、ラインハルトは彼女がヘルクスハイマー伯爵らとともに死亡したことにすると、同盟への亡命を認めてくれたのだ。その際、天涯孤独となってしまうグレーチエンに同行を申し出たのが、他ならぬヴェンツェル・ハインリッヒだった。「あなたに付いてきたのは私の選択です、グレートヒエン。強いられたわけでも、ましてあなたに同情したわけでもありません」「同情ではないのか？では、何だ？」

「そうですね。強いて言えば、あなた自身への興味……でしょう」「わたし自身への？」

面白いお嬢様だ……ヴェンツェル・ハインリッヒはそう思うのだ。だからこそ、彼女の行く末だけは何としても見届けたい。いつのまにか兆していたそんな思いの前には、男爵家の三男という社会的地位も、帝国軍少佐という肩書きも捨てるにはさして惜しさを感じさせなかった。無論、門閥貴族の娘たちの大半がそうであるように、頭蓋骨の中にクリムチーズが詰まっているような姫君とは一線を画した何かしらを持っている。そう信じたことはなかった。全くの悔恨をも伴わなかったかと言えば、そこまでは断言できないが。

さすがにその辺りは一歳の少女の理解を超えたらしい。グレーチエンは眉を顰めてヴェンツェル・ハインリッヒを見詰めた。類が僅かに紅い。

「そなた、たしか三〇歳を超えていただろう？」

「ええ、ちょうど三〇歳になります」

「その歳で少佐の地位というのは大したものだが……せめて私が一八になるまでは待つてもらわねばならないぞ。あと七年というと、そなたはもう四〇近いのではないのか？」

「はあ？」

話に付いていけずに、ヴェンツェル・ハインリッヒは啞然とする。その表情にグレーチエンは苛立ったように言葉を継いだ。

「それに妾……私も一方的にそのようなことを言われても困る。そうではないか？」

「あの……済みません、グレートヒエン。お話が見えませんが……」

焦れたい……両足を軽くほとんど踏みならして、グレー

チェンは唇を尖らせる。

「そなた、私に求婚しておるのじやろうが!」

「求婚ですって——!」

もう一度啞然として、それからヴェンツェル・ハインリッヒは悟る。確かに、若い女性に向かつて『あなた自身への興味』のゆえに祖国を捨てて、共に亡命すると表白すれば、求愛の告白と受け取られてもしようがないのは確かだった。

「あ、いえ、そういう意味ではないのです」

「——そういう意味ではない? では、どんな意味じゃ?」

この少女が生きていくことで、細やかながらも歴史が少しずつ変わっていくのではないか。その行き着く先を何としてでも見てみたい。偽らざる、それがヴェンツェル・ハインリッヒの思いだった。思いを上手く言葉にできずに使えたり、どもったりしたが、どうやら意は伝わったらしい。グレーチェンは思い切り唇をへの字に曲げると、憤ったように彼を睨み据えた。

「では、最初からそう言えば良いではないか。紛らわしいことを言うでない!」

「一歳の少女とも思えぬ剣幕に、ヴェンツェル・ハインリッヒはしどろもどろに弁解の言葉を探す羽目になる。

「も、申し訳ない。どうも私は昔から口べたで……」

ふっとグレーチェンの表情が緩んだ。

「一二歳でも女子は女子じゃということとは忘れないでいた方がいいぞ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。子供じやと思つて侮つていと酷い目に遭つ」

「心しましよう」

「それと……女子にとつて求婚というものは一大事なのじやからな。誤解させたままにしておくと、ますます酷いことになるというこゝともな……」

言い差してから、グレーチェンの表情がまた戸惑いに揺らいだ。大人びた顔つきが薄れ、年齢相応の幼さが表情を支配する。

「——何を話していたのだつたかな?」

「私の入国審査のことです」

「ああ、そうだった……」

ヘルクスハイマー伯爵はフェザーン経由で同盟に『重大な帝国軍の機密情報提供』を申し入れ、見返りとして同盟での地位と財産の保証を要求していた。情報も装置もラインハルトに奪回されたとは言え、この『重大な帝国軍の機密』に関する情報提供が、ヴェンツェル・ハインリッヒの亡命に対する条件だった。

再び、グレーチェンの表情が硬く強ばった。宿舎のある一角。二人の足はいつの間にか止まっていた。

「迷っているのじゃな?」

淡い紫の眸がヴェンツェル・ハインリッヒの目を覗き込んできた。

「ええ、迷っています」

グレーチェンの後見役としての任を全うしようとすれば、昨日まで祖国として仰いでいた帝国を裏切り、その機密を、こちらはほんの少し前まで叛徒と呼んでいた同盟軍に漏らさなければならぬ。重大な機密であり、ゆえにこそ帝国軍は危険を承知で追っ手を送り込んできたのだ。

「行こう、ヴェンツェル・ハインリッヒ。ここで立ち止まっていると、周りから変な目で見られてしまうぞ」

グレーチェンが差し出した手を、ヴェンツェル・ハインリッヒは素直に握った。掌の小ささと、ひやりとするほどに冷え切った指先の感触が、彼女の想いを伝えてくる。口調こそ、大人顔負けの気丈さを示すグレーチェンも、まだ実際には一歳の、両親を喪ったばかりの寄る辺ない少女でしかないのだということを。掌

の冷たさは、入国審査、それも亡命に対するそれへの極度の緊張と、そう言つて良ければ恐怖の表れに違いない。少なくとも、この時のヴェンツェル・ハインリッヒはそう了解した。

グレーチエンは、それなり会話を止め、それでも真つ直ぐに視線を保つたまま宿舍への道を辿る。ヴェンツェル・ハインリッヒはやはり黙々と、彼女に手を引かれるままにその後に従つた。

二つの小さなベッドルームと、小さなテーブルが一つと椅子が二脚あるだけの居室、浴室・シャワールームと洗面所、およびダイニングルームはフロアで共用という被審査者用宿舍。かつてのヘルクスハイマー伯爵邸のグレーチエン自身の居室だけでこの数倍の広さがあつただろう。が、グレーチエンは部屋の狭さや設備の貧しさには一言の苦情も口にしなかつたし、二〇歳近く年上の男性と居を共にすることへの不満も顔には出さなかつた。

その夜、グレーチエンが自分用に割り当てられたベッドルームに引き込む前だつた。

不意に黒ビールのはちとグラスを目の前に置かれ、ヴェンツェル・ハインリッヒが驚いて目を上げた先にグレーチエンの目があつた。

「これは……」

「さつき買つておいた。自動販売機と言つのか、あれは便利だな。少し酒でも呑んで、気を軽くすればいい……それで、話してもいいか、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

「え、ええ、どうぞ」

「考えたのだ——」

グレーチエンはその話題を再開した。帰路の道すがら、食事や入浴の時間も考え続けていたらしかつた。

「父上はその……何とかという装置を手みやげに亡命なさろうとした。追つ手がかつて手ぶらになつてしまつたが、持つてこよう

としたもののことを何も知らぬでは通るまい。まして、そなたは父上の郎党ではない。皇帝陛下に命ぜられ、父上を追つて来た身だ」

「それは——そうですね」

ヘルクスハイマー伯爵を追撃する過程でミューゼル中佐は一〇隻近い同盟軍の警備艦艇を撃沈しており、同盟軍もそれを把握している。彼らが何らかの機密情報をもたらそうとしていたこと。それを阻止するために帝国軍が実際に動き、おそらくは阻止に成功して脱出したらしいことを知っている。しらを切り通せる局面ではなかつた。

「では、ヴェンツェル・ハインリッヒ、それであれば、どのようなものを持つてこようとしたか、そなたが知る限りのことを話せばよい。それが帝国にも同盟にも公正というものではないか」

「公正……ですか？」

「そうだ。そなたがどう隠しても、父上が持ち出そうとなさつたものが実際に作れることは同盟に知れてしまふ」

「そうでしょうか……私があくまで否定し続けければ……」

「今日のあの木っ端役人の言つていたことを聞かなかつたのか？あの者たちにとって、帝国の人間など人間には見えておらぬ。そなたが隠そうとすれば、あの者たちはそなたを殺してでも知りたいいことを引き出そうとするに違いないぞ」

グレーチエンの言葉は、ヴェンツェル・ハインリッヒを愕然とさせるに足りた。非礼極まる入国審査官の言動に矜持を傷つけられて激昂していたに違いない彼女だが、その一方で彼らの言葉の端々に表れる、帝国への極度の敵意を読みとつていたのだ。彼自身はと言えば、彼女が無用の悶着を起こさぬよう、ひたすららはらとして見守つていただけで、同盟の人間達が彼らをどう思っているかなど、完全に視野の外だつたのだから。

「それは——そうですね。そのようなものを作れると知れば、同盟も同じものをつくらうとするだろうし、少なくとも警戒はできる。そう言うことですか」

「そうじゃ。でも、そなたは一介の情報将校であつて技術者ではない。それがどのような仕組みでどんなことができるか、そなたに分かるのはそこまでで、どうやったらそれを作れるかは知らない。結局、同盟は自分の力で目指すものを作らねばならない。少しは時間を短くできるにしても、そなたのもたらしした情報で同盟だけが利益を受けることにはならない。そう思う」

「それは、そうかも知れませんが……そうですね。もう一度、考えてみます。ありがとつ、グレートヒエン」

いつものように気むずかしい表情で応答すると思つたグレイチェンが、珍しく笑顔になつたのにヴェンツェル・ハインリッヒはもう一度驚いた。驚きが表情に出たのか、グレイチェンの方が一転して不機嫌そうに顔をしかめる。

「なんだ、私がそなたの役に立てたことを、私が喜んではいけないのか？ この国で、そなたまで無くして、一人で生きていけると思うほど、私は私のことを買つてはいない。それだけのことじゃ

それから」

テーブルの上の黒ビールを、グレイチェンは指さした。

「その酒は高くつくぞ。そなたの後見人としての俸給から引いておいてやろう」

「それは——ご勘弁を」

「いいや、勘弁ならぬ。許して欲しければ、さつさと入国審査に通つてくることじゃ」

言い捨てるなり、金髪を翻してグレイチェンはベッドルームに姿を消した。

見送り、ヴェンツェル・ハインリッヒはソファに戻ると黒ビ―

ルの缶を開ける。よく冷えたグラスに注がれた黒い芳潤な液体を咽喉の奥に流し込む。少なくともグレイチェンと行を共にする限り、退屈だけはせずに済む。何かしらの驚きに見舞われる毎日というのも悪くないものだ。

ヴェンツェル・ハインリッヒへの同盟軍の追及は厳しかった。ゼツフル粒子に、宇宙戦闘用として実用可能な速度での制御可能な指向性を持たせるという研究は同盟で行われはいた。他の媒質に混ぜて噴出させたり、宙雷弾頭に封じたりなど、初歩的アイディアがいずれも惨憺たる失敗に終わった後、同盟でも帝国軍が開発した方法とほぼ同じ考え方に達しかけてはいたのである。

しかし、ゼツフル粒子を誘導するナノマシンの開発と、その制御システムの開発はまだ確たる方向性を見いだしてはおらず、フェザン経由でヘルクスハイマー伯爵がもたらしした実証実験装置提供の件も、半信半疑よりも疑問符の方が多いという状態で受け取られていた。

最初のうちは極く穏やかだった、ヴェンツェル・ハインリッヒ……ベンドリング元帝国軍情報少佐への尋問が、彼の語る装置の概念が明らかにに連れて時間と苛烈さを増し始めたのは当然のことだった。彼の尋問結果が同盟首都へ送られ、語るところの装置と制御の概念に実現可能性が見いだされたのだ。

審査開始から二日目までは帰宅を許され、グレイチェンに事の次第を報告する時間も取れたのだが、三日目からは事情が一転する。同盟首都から同盟軍兵器研究本部の技術将校が到着し、尋問が技術的詳細に入り始めると、審問は日付が変わっても続けられるようになった。

四日目、身柄を入国審査事務所から、惑星ゾーシムの同盟軍基

地に移されることを告げられ、ベンドリングは同行者……彼の被保護者への連絡の許可を求めた。が、返ってきたのはにべもない拒絶だった。

「話の裏を合わされては困るのだよ、ヘル・ベンドリング。事と次第によっては、ミス・ヘルクスハイムにも改めて審問に付き合ってもらうことになるからな」

「私は一介の情報将校であり、指向性ゼツフル装置の実証実験装置を奪回するよう、帝国軍首脳から命じられて、それに従ったに過ぎない。装置の概念や操作方法などは既に回答したとおりだ。それ以上の技術上の詳細は、私の専門外だし、それに一二歳の女の子がそんな装置の何を知っているというのだ？」

「それは貴兄の見解だ。我々の見解はまた別にある。被保護者を庇おうとするのは立派なものかも知れないが、我々にも国家の存立を支えるという使命がある。いずれが我々に重いか、議論するだけ無駄というものだ」

「とは言え、ベンドリングがそれ以上の技術的詳細を知るわけもなかった。手を変え品を変え、あらゆる角度に質問の方向を変えての追求が為されたとしても、彼に応える術のありようはずもなかったのだ。ベンドリングへの尋問はさらに丸五日間にも及んだが、自分は一介の情報将校であって技術的詳細には通じていないとして、その概念以上には通じていないとするベンドリングの主張を覆すには至らなかった。業を煮やした同盟軍の技術将校は、自白剤の使用を主張するが、これは入国審査官によって拒否される。

「自白剤は隠している事実を引き出す効果とともに、尋問者の誘導にそのまま答えてしまふという欠点があります。ベンドリングが実際にこれ以上の知識を持たないのであれば、何かしらを引き出せたとしても、何の意味も価値もない内容でしかない可能性が

大です。それに、亡命希望者に自白剤まで使った前例はありません。そのような事実が伝われば、帝国は同盟が亡命希望者を拷問したとでも尾ひれを付けて宣伝するかも知れません」

「では……このミス・ヘルクスハイムか。この娘を尋問してはどうか。一二歳ということだし、当然、情報将校としての黙秘訓練など受けてはいないだろう？」

「既にミス・ヘルクスハイムには亡命が許可され、同盟市民としての市民権が与えられています。彼女を改めて尋問するには、裁判所の許可が必要です。それに、一二歳の女の子に、ゼツフル粒子の制御技術を質問して、まともな答えが返ってくるとでも？」

ベンドリングが尋問の終了を告げられ、拘束を解かれたのは、ゾーシムの同盟軍基地へ移されて七日目。実に、審査開始以来一日目のことだった。

審査の終了と、亡命許可の発行を告げた審査官は、最後になつてしまったが……と前置きして、ベンドリングにその質問を投げてきた。

「貴兄と共に、ミス・ヘルクスハイムと彼女の家族を追跡し、実証実験装置を奪い返していった帝国軍の指揮官のことを確認させて欲しい」

「巡航艦『ヘーシュリツヒ・エンチェン』。指揮官はラインハルト・フォン・ミューゼル中佐。副長はアウグスト・ザムエル・ワールン少佐、艦長護衛がジークフリート・キルヒアイス中尉」

ラインハルト・フォン・ミューゼル、およびジークフリート・キルヒアイスの名が、同盟側の公式記録に記録された、これが最初の出来事だった。銀河の歴史に新たな一ページを刻み込んだのだという想いは、無論、彼らの裡にはない。審査官にとっては、敵国の無数の人名の中の二つというに過ぎなかったし、ベンドリングには多少の感懐があつたかも知れないが、彼にはもっと気

にかけねばならない事があった。

丸一〇日、連絡も消息も絶やしたまま、グレーチエンを入国審査事務所の宿舎に放置しているのである。何を措いても、審査の完了を告げ、彼女の無事を確認しなければならぬところだった。

だが――

「ここは基地だからな。連絡シャトルは一日に二便だけだ。次の便は五時間後になる」

入国審査事務所とゾーシム基地では管轄が違うから、必要最小限度の連絡シャトルしか飛ばしていない……等というお役所的な説明など、ベンドリングには冗談ではなかった。

「では、映話くらいはできないのか」

「基地の通信施設は軍の施設だ。一般市民や亡命者に使わせるわけにはいかん」

「では、基地の外から連絡すればいいのか？」

「審査事務所で正式の手続きを済まるまでは、貴兄が基地の外へ出る許可は与えられないし、いずれにしても通信料を払おうにも手持ちがあるまい？」

穏和な……あるいは自らに穏和たるべきことを課していたベンドリングだったが、ここで切れた。冗談ではない。一二歳の寄る辺ない少女を一〇日間もひとりぼっちにして連絡もしていないのだ。

「そもそも私をここへ連れてきたのは卿らの都合だったではないか!？」

ベンドリングの剣幕に恐れをなしたのか、最長一〇分だけという条件で入国審査事務所の宿舎への通話を許可してくれたのだが――ベンドリングを狼狽させたのは、この映話にグレーチエンが出なかったことだった。

シャトルの時間まで、許可を得て三度、時間をおいてかけてみ

たが、いずれも発信音が空しく鳴り響くのみ。映話の画面も『呼び出し中』のテロップをフラッシュさせるだけで、金髪の少女の姿がスクリーンに現れることはなかった。

何かあった……そう判断せざるを得なかった。

そもそもグレーチエンの父ヘルクスハイマー伯が亡命せざるを得なくなったのは、帝国最大の有力者にとって重大な秘密を探り当ててしまったからだ。ミューゼル中佐がグレーチエンの亡命を敢えて見逃したのも、その秘密ゆえに彼女が暗殺の危険にさらされるのを危惧してのことである。

まさか刺客が――考え、否定する。ミューゼル中佐はグレーチエンがヘルクスハイマー伯とともに事故で死んだと報告してくれるはずだ。事実が漏れたとしても、関係者が刺客を仕立てて送り込んでくるだけの時間的余裕はない――が、マルガレータ・フォン・ヘルクスマイヤーをではなく、単に裕福そうに見える亡命貴族の子女を狙う者がいたとしても不思議ではないことに、改めてベンドリングは気づいた。審査事務所の宿舎区画には彼ら以外にも多くの亡命希望者がいた。貴族に反感を持つ平民、あるいは金に困った亡命貴族も少なからず、その中には含まれている。更には、入国審査の係官が露骨に示した態度に見られるように、あの施設自体が彼女にとって決して好意ある場所ではないのだ。

もう一度、審査官を脅し上げるようにして宿舎への保安チェックを約束させると、ベンドリングは、やつのことで発進時間が来た連絡シャトルへと向かった。

打ち上げから衛星軌道までさらに約三時間、衛星周回軌道に入ってから審査事務所のステーションにドッキングするまで、なお二時間。ステーションのドッキング・ポートの係員たちは、ゲートが開くと同時に血相を変えて飛び出してきたベンドリングに仰天する羽目になった。

一〇日余りの過酷な尋問の後である。頬がこけ、無精ヒゲが伸び放題で、髪も大きく乱したままのベンドリングが血走った目を見開いてシャトルからの通路を駆け抜け、入国ゲートを躍り超えようとしたのである。驚いた警備員が通路を封鎖し、突進しようとするベンドリングの胸に複数の銃口が突きつけた。

「待て、入国チェックがまだだ！」

「止まれ、止まらぬと撃つぞ！」

「そこをどいてくれ、急いでいる。亡命希望者のヴェンツェル・フォン・ベンドリングだ。入国審査を終えて戻ってきた。直ぐに宿舎に戻らねばならないんだ。どいてくれ！」

「ダメだ。規則は規則だ。発砲は警告ではないぞ！ 亡命希望者だというなら、入国カードは何処だ？」

もどかしげに、ベンドリングがポケットを指差す。警備員の一人が銃を突きつけたまま、もう一人がポケットからカード入れを取り出した。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング。元帝国軍少佐。昨日、二月二日付けで亡命が許可されている。本人に間違いはないか？」

「本人だ！」

怒鳴り返し、ベンドリングは何かに気づいたように目を睜った。

「今、何と言った？」

「昨日付で亡命は許可されている。それがどうした？」

「その前だ、いや、昨日が何日だった？」

「二月二日だ。それがどうかしたか……」

「二月二日……昨日が二日だったのか……」

「ああそうだ。宜しい、ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング本人と確認した。審査事務所からベンドリング本人に連絡が入っている。宿舎に異常はない。お前の同行者は、宿舎

でお前が帰ってくるのを待っているそうだ」

「え——？」

やや表情を緩め、係官が入国カードをベンドリングに返した。「まだ最終手続が残っているが、それは明日でも良いことになっている。早く帰ってやれ」

相手の言葉が脳裡で分解され、理解に達するまで数秒の時間を要した。シャトルが飛び立ち、ステーションにドッキングするまでの数時間、ベンドリングの内心を占めていたのは最悪の予想ばかりだった。それらの予想総てをあつさり覆す言葉が、しばらくは理解できなかったのも当たり前と言っべきだった。

「待っている？」

「ああ——悪いが後ろがつかえている。手続きが終わったらさっさと行ってくれ。こっちは忙しいんだ」

漸く言われた意味が理解できた瞬間、ベンドリングは膝から力が抜けそうになった。ゲートに列をなしている、シャトルでの同行者たちの視線に気づき、辛うじて通路の端に座り込む。全身から安堵の汗が噴き出し、ベンドリングは掌で口元を覆った。

オーディン

「大神よ……感謝します」

『誰じゃ？』

宿舎のインタフォンから、帝国公用語の聞き慣れた少女の声が流れ出した時、ベンドリングは再び安堵で膝を突きそうになった。「私です。ヴェンツェル・ハインリッヒです」

『——』

微かに息を呑んだような響き。小さく喘ぐような音がその後に続いた。

『——まことにヴェンツェル・ハインリッヒ、そなたか？』

「遅くなつて申し訳ありません。連絡もできなかったことをお詫びします。同盟の尋問が……」

言い差した時、ドアの電子ロックの外れる音がし、ドアが内側から開かれた。

フロイライン・グレートヒエン

「グレートヒエンさま!？」

驚くベンドリングを前に、淡い金髪の少女は冷然たる視線を投げ上げた。

「何をそんなところで弁解している? 話なら中でゆつくりすればよい。そんなところで大きな声で同盟軍がどうのとか、尋問があだとか喚き散らしたら、我らがどのような素性の者が自分で触れて回つてしまうようなものではないか。素性のことには重々注意せよと何度も申ししたのはそなただぞ」

ちよつと怒つたような口調で決めつけると、グレーチェンは身を翻す。慌てて、ベンドリングも彼女を追つて中に入った。

グレーチェンは、共用ルームの窓際で両手を腰に当ててベンドリングを待つていた。表情は硬く、久しぶりに彼女の保護者と再会した喜びを浮かべているようには見えなかった。

「話は後でいい。先にシャワーでも浴びると良い。狭いのだから、そんななりで側に居られると鬱陶しいし、第一汗くさい」

露骨に顔をしかめて、グレーチェンは鼻を摘んで見せる。

「は、はい……」

「そなたがおらぬ間に、同盟の公用語を学んでおつた。事務所で教材と催眠学習装置とやらを貸し出してくれた。今日の分がまだやりかけだから、そなたがシャワーを浴びている間に済ませてしまつつもりだ。昨日はちよつと居住エリアとやらに出かけてみたが、まだ、全然通じなかつたから……」

亡命を許可され、市民権が付与されると同時に、ステーション内の一般エリアへの立ち入りも許可されている。主に入国審査機

関の職員とその家族を対象にした細やかなショッピング・モールや娯楽施設があるという。彼女はそこへ出かけていったというのだ。

「お一人で……?」

「あたりまえじゃろう? そなたがおらぬのだから、妾……^{わが}……ではない、私一人で出かけるしかないではないか?」

怒つたように言い放ち、グレーチェンは踵を返した。

「で、ヴェンツェル・ハインリツヒ、シャワーを浴びて着替えるつもりがあるのか。それとも、そのなりのままで私と話を続けたのか、どちらじゃ? そのなりのままでいるつもりなら、そなたが身だしなみを改めるまで、私はベッドルームに引きこもっていることにするぞ」

分かりました、直ぐにシャワーを浴びてきますから、お話はその後にしませう——言いかけ、ベンドリングはふと気づいた。

「昨日、お出かけになつていたのでですね。一般エリアへ」

「そうじゃ」

「何かご用でもおありだったのでしょうか?」

「用……? 用がなければ出かけては駄目なのか、ヴェンツェル・ハインリツヒ?」

金髪を揺すぶるようにして、グレーチェンはベンドリングを見上げる。明らかに機嫌を害したように、その表情が硬さを増し、目の光りも強い。

「一日も一人で待たされたのだ。外出くらいはしたくなって当たり前ではないか!？」

「いえ、そんなことを申し上げるつもりはないですよ、グレートヒエン」

携えてきた紙袋を開き、彼女の鼻先にひよいと差し出す。淡い紫色の目が大きく見開かれ、そつするといつぱんに一歳の子

の表情に戻ってしまう。

「お誕生日、おめでとうございます、グレートヒエン」

小さな熊のぬいぐるみと、同じく小さなケーキの包みには二本の蠟燭が添えられていた。

信じられないものを目にした表情で、グレイチェンは視線をベンドリングの手許と彼の目との間を往復させる。

「——そなた、覚えていてくれたのか？」

「当たり前でしょう。つい一〇日前、申告なさったばかりでしょう。宇宙暦七八一年二月二日生まれだ。と。一二歳のお誕生日、おめでとうございます。これは私からの細やかなお祝いです」

「……そうか、一二歳か。私は、もう一二歳なのだな」

呟き、グレイチェンは小熊を受け取った。

「この子にも名が必要だな——そうだ、ミューゼルにしよう」

「ミューゼル……ですか？」

「ああ、ミューゼル。ちょうどいいだろう？ ジークフリートもいることだし」

父から贈られた一抱えもある大きな熊のぬいぐるみを、彼女は亡命に際しても携えてきた。ラインハルトとキルヒアイスの二人と別れる時、彼女は、それまで名のなかった大きな熊に名を付けた。ジークフリート……と。

「なぜ、彼の名前を付けないのですか？」

「理由などない……」

考え、グレイチェンは頭を振った。

「私があの子を名で呼べるようになるとは思えない。そんな気がした。あの者を名で呼んでよいのは、多分、ジークフリートだけだ」

金髪の若者に片時も離れずに付き添い、そしてラインハルトに『友人です』と呼ばせた赤毛の少年の名を、グレイチェンは挙げ、

僅かに頬を紅くした。亡命に際しての後見人として、グレイチェンはジークフリート・キルヒアイスを望んだが、それは叶わなかった。ラインハルトがキルヒアイスを『友人』と呼んだ時、グレイチェンの表情に浮かんできたのが驚きと理解と、そして諦めだったのを、ベンドリングははっきりと覚えている。

確かに、自分ではあの赤毛の少年には到底及ぶまい。彼女が小熊にラインハルトの名を付けるのは、それだけ彼女の、キルヒアイスへの想いが深いと言うことに相違ない。思い、ベンドリングが感じたのは羨望だったかも知れないし、あるいは嫉妬と呼んで良かったかも知れない。

「何を変な顔をしているのだ、ヴェンツェル・ハインリッヒ？ せっかく買ってきてくれたのだ。有り難く頂くぞ」

ベンドリングを現実世界に呼び戻したグレイチェンは、さつさと包装を解いたケーキをテーブルに載せ、蠟燭を立てていく。

「——!!」

その時、明らかな空腹を示す音響を盛大に鳴り響かせたのは、確かにグレイチェンの腹部だった。

「フ、フロイライン・グレートヒエン？」

きつい光を帯びた紫の視線が、ベンドリングの面上を激しく突き刺した。

「笑うな、ヴェンツェル・ハインリッヒ！」

「——」

そう、昨日二月二日。その日が自分の誕生日であることを思い出したからこそ、グレイチェンは一般エリアへ出かける気になったのだ。たった一人の後見人であり、彼女の友人であるベンドリングからは何の連絡もなく一〇日が経過した。同盟政府と同盟軍からの執拗な尋問を受け、連絡もできない環境におかれているのだらう。優れて聡明な彼女には自明だったが、それでも誕生

日に異境にただ一人という現実は一歳の少女には耐え難いものがあった。

さして数があるわけでもないレストラン。グレイチェンの感覚から言えば、レストランの看板を挙げるにも値しないような店ばかりだったが、言葉もろくに通じず、明らかに帝国の、それも貴族の亡命者と分かる彼女への応対は冷やかさを通り越したものだ。最前線に近いこのステーションの住民の帝国への敵意は強い。

そうする内、一人では何を食べても美味しくはない気がしてきた。一人での外食を諦めて宿舎に戻る道すがら、ファースト・フードのチェーン店で初めてハンバーガーというものを買ってみた。宿舎の食堂よりもよほどましと思ったのだが。

「余りに不味く^{ます}て食べる気になれなかった。だから、腹が空いているのは当たり前ではないか!?」

そんなことはない。帝国の門閥貴族生まれのグレイチェンからしてみれば、美味であるはずはないが、おそらくはぎりぎりまで経費を削られているだろうこの宿舎の食事よりも、彼女が訪れただろうハンバーガー・シヨップの方がよほどに味や温度の点では上等と評すべきだ。

「——!」

ケーキに蠟燭を立て終わったグレイチェンに、ベンドリングは軽く胸を衝かれる思いを抱く。

「フロイライン・グレートヒエン。そのケーキを食べ終わったら、外へ出ましょう」

「——?」

「あなたの一二歳の誕生日と、それから私の亡命も認められた、そのお祝いです。私と一緒になら、言葉の心配は要らないでしょう」
即答はなかった。視線をケーキに据えたまま、火を付ける道具

はないのかと問う。たばこを吸う習慣はなかったが、ケーキを買った店が紙マツチをおまけしてくれていた。

紙マツチを扱い慣れていないグレイチェンを制して、ベンドリングは小さなケーキの上に所狭しと並んだ蠟燭に火を付けていく。決して明るくない室内の照明の中、明々と灯った一二個の炎が、グレイチェンの髪に金色の光を揺らめかせ始めた。

「余り長く点けておくとケーキのクリームが溶けてしまいますよ、フロイライン・グレートヒエン」

「——フロイラインは止めよと言った」

グレイチェンは一息に蠟燭を吹き消したが、相変わらず視線を俯かせたままだった。再度、外出の可否を問うベンドリングにも、視線を動かそうとしない。自らの意志を示すのを躊躇わないグレイチェンにしてあり得ない態度だったから、ベンドリングとしては言葉の接ぎ穂を失うしかなかった。

何か機嫌を損ねるようなことを言っただろうか。彼の知る限り、グレイチェンは多少のわがままさはあるにしても、生まれに鑑みれば奇跡的なほど、その程度は許容範囲に収まっている。どころか、いわゆる門閥貴族の令嬢で、彼女ほどに物わかりが良く、利発と言っている少女をベンドリングは知らない。

彼女が拗ねたり、怒ったりする時にはそれなりの理由があるはずなのだが、この時の彼には思いつかなかった。強いて言えば、審査が予想以上に長くかかり、彼女を長期にわたって独りのままに放置したことだが、これまでの会話では、そのことで殊更にへそを曲げている様子はない。

彼女の意思が読めぬままに、ケーキを切り分ける。と言っても、余り甘いものを好まないベンドリングとしては大半を彼女の分に割り当てたのだが。

ベンドリングに促されてグレイチェンがケーキを一口、口に

運んだ時だった。

この後、外で食事をするなら余りしつかり食べてしまうのもどうかと思われるし、と言って飲み物が何も無いと言うのも味気ないだろう。ついでに例のハンバーガー・シヨップでも飲み物を手に入れてくれば良かった。それとも食堂で何か手に入れてくるか——そんなことを考えて、ベンドリングはちょうどドアの方を振り向いていた。

不意の金属音がベンドリングを驚かせた。

キー・ナイフを落とした音だと気がつく前に、グレーチェンが全身で彼に飛びついて来た。

訓練された軍人の反射神経が咄嗟に彼女を突き飛ばそうとするのを、相手が被保護者であるという意識と、さらに飛びついてきたグレーチェンの全身の震えとが抑え込んだ。

「私が、どれだけ、あなたが帰ってくるのを待っていたかも知らぬくせに!!」

咳き込みながら、グレーチェンが上げた叫び声は、ベンドリングを真から驚かせた。つまり、涙声だったのだ。

「グ、グレートヒエン?」

「私だって、あなたが無事に帰ってきてくれて嬉しいのだ。事情だって分かってるつもりだ。連絡もできないようなところで質問攻めにされていたのだろう!? そんなことは分かっていた、分かっていた!!」

分かっていたが、どうしても万一、万々がーのことを考えずにはいられなかった。最初の数日はともかく、後半の何日かはほとんど何も食えることができなかったばかりか、空腹だという感覚すら失っていた。一〇日が過ぎ、漸く極度の心労と空腹に気づいたからこそ街へ出かけたのだが、ほとんど味は分からなかったほどだったのだ。

「ドッキング・ポートから照会が来た。ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングという人物が暴れている。私の保護者か——と。その時の嬉しさが分かるか、ヴェンツェル・ハインリッヒ!」

グレーチェンは言う。見捨てられなかった。自分は独りではなかった、と。

「それで、何と答えたのですか?」

「私の唯一無二の保護者で、友人^{とも}じゃと答えた……随分、変な顔をしておったが」

「それは……」

「あなたは私の友人^{とも}だろう? だから、あの子には……」

テーブルの上の小熊に、グレーチェンは視線を走らせた。泣きはらした目元を見られたくないのか、直ぐにベンドリングの服に頬を埋めてしまったが。

「……ミューゼルと名付けた。側にいてくれる友人の名前を付ける必要などどこにもないだろう?」

小熊が『ミューゼル』と名付けられたことに一瞬の不快さを覚えたことを、ベンドリングは恥じずにはいられなかった。僅か一二歳……正確には一歳のこの少女の後見として、祖国を捨てた自分の選択を、彼はこれまでの人生の中で最も正しい判断であることを、この時に確信したのだ。

やがて、漸く涙が止まったらしいグレーチェンが両手をつ張るようにしてベンドリングから身体をもぎ離し、わざとらしいいかめ面を作って彼女の保護者を見上げた。



「——それで、外へ食事に行くと言つ話はどうなったのだ？ 私
はもつ腹が減つて倒れそつた」

ベンドリングは笑うしかなかった。

「その前にシャワーを浴びさせて頂ければ幸いです、グレート
ヒエン」

「確かに、その必要があるな」

グレイチェンの表情が真物の洪面になつたようだった。

「汗くさいぞ、本当に——」

こうして、マルガレータ・テレゼ・ヘルクスマイヤーことグ
レイチェン・ヘルクスハイムとヴェンツェル・ハインリッヒ・
フォン・ベンドリングの二人が正式に亡命を許され、自由惑星同
盟の市民となつたのは宇宙暦七九三年二月二三日。同盟での戸籍
を得たグレイチェン・ヘルクスハイムが一一歳（本来なら一一歳）
の誕生日を迎えた翌日のことである。二人の名は、この年の亡命
者名簿の中に一瞬だけ現れ、そして、再び歴史の大きな波の中に
紛れていく。彼らの名が、再び歴史の表層に浮かび上がってくる、
その最初のきっかけはこの四年後、帝国暦四八八八年のことである。
帝国暦四八八八年。つまり宇宙暦七九七年。銀河が歴史の巨大な
転換点を迎えた年である。